

## 研究論文

## 看護学生が老年看護学概論の講義終了時に持った高齢者イメージの検討

高岡 哲子・岡本 麗子・榊原 千佐子・小堀 ゆかり

(2011年1月14日受稿)

**抄録：** 本研究の目的は看護学生が、老年看護学概論の講義終了時に持った高齢者イメージを基に、高齢者理解を深めるための教育方法を検討することである。協力者は、4年制大学看護学科2年生で、研究協力に同意した162名だった。データ収集は、指定用紙に高齢者イメージを時間内に記述してもらう方法で、データ分析は内容分析を用いた。

この結果、得られたデータは2352で、29のカテゴリーと437のサブカテゴリーが抽出された。カテゴリーは、『生活体験に関連した高齢者イメージ』と『既習内容に関連した高齢者イメージ』、『両者に関連した高齢者イメージ』に分類できた。このうち、多かった高齢者イメージは、『生活体験に関連したイメージ』であった。老年看護学に関する学習を始めたこの時期は、高齢者イメージに対して、自らの生活体験が優位に働くことが考えられた。しかし、カテゴリーが29個と、ある程度の絞り込みができていたことは、老年看護学に関連した既習内容により視点が絞られたためと考える。よって、学生が記述した高齢者イメージは、学習内容と自らの生活体験を関連づけた内容であったことから、高齢者理解を深めるグループ討議の教材として活用できることが示唆された。

## I. 序 論

我が国は、2000年に健康日本21が制定されたころから、生命の延長だけではなく生命の質を重視する、『健康寿命』と言う考え方が提唱されるようになってきた<sup>1)</sup>。また、国民においても、加齢に伴う物忘れをポジティブに捉えた「老人力<sup>2)</sup>」や、老いを遠ざけるのではなく準備をしようとする「老い力<sup>3)</sup>」が出版されたり、「新老人の会<sup>4)</sup>」が注目されたりと、老いを肯定的に受け止め、高齢者の持っているパワーに注目する考え方が広がっている。中島ら<sup>5)</sup>は、高齢者のポジティブな側面に着目することに対して「高齢者の健康や疾病・障害の状態や程度がどうあれ、高齢者自身が持っているパワー（生命力、英知、生きる技法など）を洞察し、自立への志向性を信頼し、支援することにおいて発想を転換する必要性を強調されるようになった」と述べ、老年看護学においても、

高齢者のポジティブな側面に着目することの重要性が主張されている。

しかし、高度経済成長期を境にして核家族化が進行し<sup>6)</sup>、高齢者と生活した経験のある若者が減少しており、看護学生においても同様であることが推測される。また、近年、マスコミなどで取り上げられる高齢者は、詐欺被害、孤独死、年金問題など、ネガティブな内容が多い。これらの情報の影響を受けて、若者は高齢者に対してマイナスイメージを持ちやすいと言われている<sup>7)</sup>。確かに、高齢者にはこのようなマイナスな側面がある。しかし、これらに着目することは高齢者の真の姿を見失い、高齢者のニーズに合わない看護を提供する危険性を持つ。よって、老年看護学教育では、学生が持つと思われる偏った高齢者へのイメージを現実の豊かなものに広げられるように支援することが重要である。ここで問題となるのは、高齢者との生活経験が少ない看護学生に対して、豊か

な高齢者へのイメージを持ってもらう教授法である。

高岡ら<sup>8)</sup>は、「高齢者疑似体験」を活用し、高齢者理解を深めるための教育カリキュラムを構築するため、学生の高齢者観を検討した結果、研究対象は高齢者の不自由である状態を理解しながらも個体差に着目し、ネガティブな高齢者観とポジティブな高齢者観をバランスよく持ち合わせていたと報告した。さらに高岡と服部<sup>9)</sup>は、看護学生がもった通所施設見学後の高齢者観を明らかにした結果、「ポジティブな高齢者観」と「多様な高齢者観」、「個体差がある高齢者観」が特徴的に抽出され、ポジティブな高齢者観を育むために、デイケアやデイサービスの通所施設を見学することの有効性が示唆されたと報告した。紺谷ら<sup>10)</sup>も同様の研究において、施設見学が豊かな高齢者観を育成する効果があると報告していた。

しかし、これらの方法が有効であったとしても労力やコスト、時間などを要するため、どの教育機関でも実践できるとは限らない。そこで、今まで行われていた以外で高齢者のイメージを豊かにする教育方法はないものかと考えた。

よって本研究の目的は、看護学生が、老年看護学概論の講義終了時に持った高齢者イメージを基に、高齢者理解を深めるための教育方法を検討することである。

## II. 方法

### 1. 協力者

協力者は、4年制大学の看護学科2年生で、研究協力に同意した者であった。

### 2. 期間

研究期間は、2009年から2年間であった。

### 3. 老年看護学に関連する科目と老年看護学概論の授業計画

老年看護学に関連する科目は表1に示す。

老年看護学概論（2年次前期：30時間）は、老年期の身体機能や精神・社会生活の特徴を理解

し、健康とQOLを高める老年看護の役割と地域社会における看護活動を学ぶ。老年看護学健康論（2年次後期：30時間）は、高齢者に多くみられる疾患の病態生理と治療法、さらに、生活援助における強みを引き出すケアを学ぶ。老年看護・介護福祉システム論（3年次前期：15時間）は、高齢者の医療、保健福祉職との連携を図りながら看護者の役割、国、自治体の保健医療福祉施策を考え、介護福祉システム論などを系統的に学習する。老年看護学援助論（3年次前期：30時間）は、老年看護学の基礎となる知識を活用し、高齢者の個別性を適確に捉えた看護過程の展開を行う思考過程を身につける。老年看護学実習Ⅰ（3年次後期：45時間）は、保健・医療・福祉施設で療養生活を送る高齢者の生活を理解し、施設での看護専門職が果たす役割について学ぶ。老年看護学実習Ⅱ（4年前期：90時間）は、疾患や障害を有している生活者としての老年者に対して、生活機能の観点から看護過程の展開を実践しながら、看護の専門職業人としての自覚を持ち、看護観や人間観についての考察を深める。以上の科目と学習内容によって構成されている。

老年看護学概論の授業計画は、表2に示す。

老年看護学概論は、15回（30時間）行われた。学習内容は、ライフサイクルにおける高齢者の位置づけをふまえたうえで、高齢者を理解するために、加齢に伴う身体的・生理的变化や社会的な役割の変化について学習した。次に高齢者を取りまく社会として、高齢者に関連した法律、家族、倫理的課題に取り組む。これらの知識を基に、高齢者の生活から老年看護の役割を考える課題を、グループ討議して結果を発表するように計画した。

### 4. データ収集

老年看護学概論の授業回数10回のグループ討議開始前に、「高齢者は\_\_\_\_\_である」と50個記載されたA4判の指定された用紙1枚を各学生に配布し、集団に対して時間内にできるだけ多くの高齢者に対するイメージを記すように説明した。制限時間は10分で、計測は教員が行った。

表1 老年看護学に関連した科目

開講学年と学期	科目名	学習内容
2 年次前期	老年看護学概論	老年期の身体機能や精神・社会生活の特徴を理解し、健康と QOL を高める老年看護の役割と地域社会における看護活動を学ぶ。
2 年次後期	老年看護学健康論	高齢者に多くみられる疾患の病態生理と治療法、さらに、生活援助における強みを引き出すケアを学ぶ。
3 年次前期	老年看護・介護福祉システム論	高齢者の医療、保健福祉職との連携を図りながら看護者の役割、国、自治体の保健医療福祉施策を考え、介護福祉システム論などを系統的に学習する。
3 年次前期	老年看護学援助論	老年看護学の基礎となる知識を活用し、高齢者の個別性を適確に捉えた看護過程の展開を行う思考過程を身につける。
3 年次後期	老年看護学実習 I	保健・医療・福祉施設で療養生活を送る高齢者の生活を理解し、施設での看護専門職が果たす役割について学ぶ。
4 年次前期	老年看護学実習 II	疾患や障害を有している生活者として的高齢者に対して、生活機能の観点から看護過程の展開を実践しながら、看護の専門職業人としての自覚を持ち、看護観や人間観についての考察を深める。

(人間科学部 2010 年学生便覧・シラバスと老年看護学実習 II 実習要項より抜粋)

表2 老年看護学概論の授業計画

授業回数	学習内容
1 回	ライフサイクルにおける高齢者の位置づけ
2 回	加齢に伴う身体的・生理的变化、社会的役割の変化：老化と加齢による生理的現象
3 回	加齢に伴う身体的・生理的变化、社会的役割の変化：加齢の受容と適応と発達段階的側面
4 回	高齢社会における社会保障
5 回	老年看護の展開：高齢者のための国連原則・憲法第 25 条と社会保障
6 回	老年看護の展開：看護師倫理要領と老年看護・高齢者の生活の質とは・老年看護学における看護の役割
7 回	在宅における老年看護の考え方
8 回	高齢者を介護する家族の支援
9 回	高齢者の倫理的課題
10 回	高齢者の生活から老年看護の役割を考える：グループ討議
11 回	高齢者の生活から老年看護の役割を考える：グループ討議
12 回	高齢者の生活から老年看護の役割を考える：グループ討議
13 回	高齢者の生活から老年看護の役割を考える：グループ討議
14 回	高齢者の生活から老年看護の役割を考える：発表
15 回	高齢者の生活から老年看護の役割を考える：発表

(人間科学部 2010 年学生便覧・シラバスより抜粋)

終了後、回収した。

## 5. データ分析

データ分析は以下の方法で行った。

- 1) 学生が記載した「高齢者は\_\_\_\_\_である」を全て、データとして扱った。
- 2) データに連続番号をつけた。
- 3) データの文脈を整理し、1文章に1内容が含まれるように切片化して、記録単位とした。
- 4) 記録単位は、意味内容の類似性に合わせてサブカテゴリーとカテゴリー化し、記録単位数とサブカテゴリー数を計測した。

## 6. 倫理的配慮

データ収集を行う前に、集団に対して研究の趣旨、協力の有無が成績や今後の学業に影響しないなど、不利益とその対処法も説明した。また、提出したことで研究への同意を得たものと判断することを伝え、用意した箱に協力者自身が直接、提出するようにした。

## Ⅲ. 結果

### 1. 協力者の概要

協力者は説明を受けた162名中、同意が得られた162名だった。男性が21名で女性は141名であった。1名の協力者から得られた高齢者のイメージは、平均14.5個で、最大値は31個、最小値が1個とばらつきがあった。アンケートを行った老年看護学概論の授業回数10回は高齢者の特徴に関する講義がすべて終了した段階であった。

### 2. 協力者から得られた、高齢者のイメージ

協力者の記述から得られたデータは2352であった。この分析の結果29の「カテゴリー（サブカテゴリー数）」と437の「サブカテゴリー（記録単位数）」が抽出された。

高齢者のイメージは表3に示す。

カテゴリーは「性格に特徴がある (66)」「加齢に伴う変化がある (62)」「行動に特徴がある (55)」「好みがある (56)」「見た目の特徴がある (24)」「自らの価値観がある (15)

「人とのかかわりを大切にする (14)」「特技がある (11)」「保護や介護を必要とする (12)」「経済的特徴がある (11)」「生活に余裕がある (9)」「体調を崩しやすい (9)」「英知がある (9)」「穏やかである (9)」「歴史を大切にする (8)」「社会性がある (8)」「人生経験がある (8)」「高齢者特有の制度がある (7)」「自律している (7)」「暗い生活を送っている (6)」「尊敬できる (5)」「日常生活において自分のペースがある (5)」「慈悲深い (4)」「体調に気を使う (4)」「死を意識する (4)」「においがする (3)」「個性差がある (3)」「疫学的特徴がある (2)」「私たちと変わらない (1)」であった。

「性格に特徴がある (66)」は、「やさしい (58)」「穏やかである (24)」「かわいい (15)」「元気である (13)」「落ち着きがある (12)」などのポジティブな側面に着目したイメージや、「さみしがり屋である (13)」「頑固である (52)」「わがままである (11)」「口うるさい (11)」「融通が利かない (11)」などのネガティブな側面に着目したイメージによって抽出された。

「加齢に伴う変化がある (62)」は、「動作が緩慢である (52)」「しわがある (51)」「老眼である (49)」「体が小さい (45)」「白髪である (35)」「腰が曲がる (34)」「義歯を使用している (18)」「杖を使用する (14)」「髪が薄い (13)」など直接的な加齢に伴う変化と「難聴である (55)」「脚腰が不自由である (38)」「身体が不自由である (33)」「身体が衰えている (28)」「体力が低下している (27)」「けがをしやすい (27)」「少食である (14)」「疲れやすい (14)」「寒がりである (13)」「筋力が衰える (11)」「括舌が悪い (10)」など、加齢の変化に伴う日常生活への影響に関連するイメージ、そして「認知機能が衰える (11)」「物忘れがある (16)」など認知症に関連したイメージによって抽出された。

表3 協力者がもった高齢者のイメージ

カテゴリー	サブカテゴリー数	分類
加齢に伴う変化がある	62	既習内容に関連した 高齢者イメージ
高齢者特有の制度がある	7	
個体差がある	3	
疫学的特徴がある	2	
性格に特徴がある	67	
好みがある	56	
行動に特徴がある	55	
見た目に特徴がある	23	
自らの価値観がある	15	
人とのかかわりを大切にする	14	
特技がある	11	生活体験に関連した 高齢者イメージ
生活に余裕がある	9	
英知がある	9	
穏やかである	9	
歴史を大切にする	8	
社会性がある	8	
人生経験がある	8	
自律している	7	
暗い生活を送っている	6	
尊敬できる	5	
日常生活において自分のペースがある	5	両者が関連した 高齢者イメージ
慈悲深い	4	
においがする	3	
保護や介護を必要とする	12	
経済的特徴がある	11	
体調を崩しやすい	9	
体調に気を使う	4	
死を意識する	4	
私たちと変わらない	1	

《行動に特徴がある (55)》のサブカテゴリーは、＜マナーが悪い (3)＞と＜マナーに厳しい (1)＞や＜日に当たらない (1)＞＜日に当たるのが好きである (1)＞、＜注意深い (1)＞＜注意力が低下している (1)＞などの対極のイメージや、＜おしゃれである (3)＞＜コミュニケーション能力が高い (1)＞＜独り言が多い (3)＞＜話を聞いてくれない (2)＞など、すべての記録単位数が『5』以下でばらつきがあった。特記すべきは、＜酔うと愚痴が多い (1)＞と、高齢者だけのイメージとは考えにくいサブカテゴリーによっても抽出された。

《好みがある (56)》は、＜演歌が好きである (17)＞＜テレビを好む (14)＞＜ゲートボールを好む (11)＞など、直接趣味につながる好みと、＜和を好む (29)＞＜趣味を好む (25)＞＜お茶を好んで飲む (18)＞＜家を好む (16)＞＜畑仕事を好む (13)＞＜昔話を好む (11)＞など、細部に言及しない高齢者のイメージによって抽出された。

《見た目に特徴がある (24)》は、少数意見が多く＜地味である (5)＞＜背が低い (4)＞＜着物を着る (3)＞などのイメージによって抽出された。

《自らの価値観がある (15)》は、＜自らの考えがある (19)＞などが抽出された。さらに＜選挙が好きである (1)＞と、高齢者に限らないサブカテゴリーも抽出されていた。

《人とのかかわりを大切にする (14)》は、＜話し好きである (37)＞＜社交的である (19)＞などによって抽出された。

《特技がある (11)》は、＜料理が上手である (19)＞などが抽出された。

《保護や介護を必要とする (12)》は、＜介助が必要である (17)＞や＜事故に巻き込まれやすい (6)＞＜事故にあいやすい (6)＞＜法律で保護されている (2)＞などによって抽出された。

《経済的特徴がある (11)》は、＜お金をく

れる (2)＞＜年金生活者である (31)＞などによって抽出された。

《生活に余裕がある (9)》は、＜時間に余裕がある (14)＞などによって抽出された。

《体調を崩しやすい (9)》は、＜病気にかかりやすい (62)＞＜薬を服用している (17)＞＜身体に悩みがある (1)＞＜通院している (8)＞などによって抽出された。

《英知がある (9)》は、＜博識である (93)＞＜人生経験が豊富である (52)＞＜尊敬すべき存在である (12)＞などによって抽出された。

《穏やかである (9)》は、＜笑顔が素敵である (10)＞などによって抽出された。

《歴史を大切にする (8)》は、＜歴史に詳しい (5)＞などによって抽出された。

《社会性がある (8)》は、＜礼儀作法を知っている (6)＞などによって抽出された。

《人生経験がある (8)》は、＜戦争体験がある (13)＞などによって抽出された。

《高齢者特有の制度がある (7)》は、＜老年者用のサービスがある (1)＞などによって抽出されたがすべての記録単位数が『1』であった。

《自律している (7)》は、＜自立している (5)＞などによって抽出された。

《暗い生活を送っている (6)》は、＜孤独である (6)＞などによって抽出された。

《尊敬できる (5)》は、＜宝である (1)＞などによって抽出されたがすべての記録単位数が『1』であった。

《日常生活において自分のペースがある (5)》は、＜早寝早起きである (83)＞などによって抽出された。

《慈悲深い (4)》は、＜子どもが好きである (13)＞＜孫が好きである (13)＞などによって抽出された。

《体調に気を使う (4)》は、＜散歩を好む (23)＞＜健康に気をつける (21)＞などによって抽出された。

《死を意識する (4)》は、＜残りの人生が少

ない (2) ><死が近い存在である (19) ><死への恐怖がある (1) >によって抽出された。

《においがする (3) 》は、<お線香の匂いがする (2) >などによって抽出された。

《個体差がある (3) 》は、<個人差が大きい (9) >などによって抽出された。

《疫学的特徴がある (2) 》は、<日本に多く存在する (4) >などによって抽出された。

《私たちと変わらない (1) 》は、<私たちと変わらない (1) >のみのサブカテゴリーによって抽出された。

表4 教授された高齢者の特徴<sup>11)</sup>

テーマ	内容
老化	加齢・老化・個体差、個人差
身体的・生理的側面	身体的、生理的な老化・主な器官の老化による諸相
心理・精神 ・スピリチュアル的側面	老性の自覚・老いの受容と適応・老化に関する社会学的理論
発達段階的側面	知能の変化・発達課題・生きがい
社会的側面	役割機能の変化・生活パターンの変化・経済機能の変化

## IV. 考 察

### 1. 高齢者のイメージの概要

本研究で抽出されたカテゴリー数が29個で、協力者はある程度、類似したイメージを持っていたことがわかる。しかし、このイメージを表現したサブカテゴリー数が437個とばらつきがあった。このことから協力者が多くの視点で高齢者をイメージしていたことがわかる。しかし、1名の協力者から得られた高齢者のイメージは、最大値が31個、最小値が1個とばらつきがあった。つまり、すべての協力者が高齢者へのイメージに対して多くの視点を持っていたわけではないことがうかがえた。この差は、協力者の個人差によるものであったと考える。

### 2. 協力者の『生活体験に関連した高齢者イメージ』と『既習内容に関連した高齢者イメージ』

《性格に特徴がある (66) 》に含まれたサブカテゴリーは、<やさしい (58) ><穏やかである (24) ><かわいい (15) ><元気である (13) >などであった。この高齢者の性格に関連

した学習は、表2に示したように授業回数3回の『加齢の受容と適応』との関連で教授した。学習内容は、教科書として使用している奥野と大西<sup>11)</sup>の書籍に基づき、「ライチャードによる人格特性の5パターン」や「ニューガルテン、ハヴィガースト、トービンによる人格特性の4パターン」などであった。しかし、性格に特徴があるとは教授していない。何故なら、「加齢に伴い人格がどのように変化するかについてはいくつかの説がある。しかし、加齢自体が原因で人格に普遍的な変化をきたすことはほとんどない<sup>5)</sup>」とされているからである。さらに、イメージの中には対極のイメージである<マナーが悪い (3) >と<マナーに厳しい(1) >などがあった。これらのことから、《性格に特徴がある (66) 》に含まれたサブカテゴリーは、協力者自らの生活体験が影響していることが推測できる。他にも、《行動に特徴がある (55) 》《見た目に特徴がある (24) 》など、協力者の生活体験が影響していると思われるカテゴリーが多く抽出されていた。つまり、老年看護学に関する学習を始めたばかりのこの時期に抽出

される高齢者のイメージは、自らの体験が優位に働くことが考えられた。しかし、前述したように、カテゴリー数は、29個に絞られていた。これは、データ数やサブカテゴリー数から考えると、高齢者のイメージが協力者の生活体験を基に表現されているようでも、老年看護学概論により、協力者の思考の中ではある程度の絞り込みができていたものとする。さらに前述したように、核家族化の影響に伴い<sup>6)</sup>、若者は老年者との生活経験が少ないことが推測された。これは本協力者にとっても同様であろう。このような状況であっても、高齢者へのイメージが多岐にわたって表現されていることから考えると、かかわりが少ないながらもイメージを持つことは可能であると考えた。

一方、老年看護学に関する学習の既習内容の影響を受けたと思われる、カテゴリーも抽出された。《加齢に伴う変化がある (62)》《高齢者特有の制度がある (7)》《個体差がある (3)》などである。《加齢に伴う変化がある (62)》《個体差がある (3)》は、表2に示した老年看護学概論の授業回数1から3回の学習内容であり、《高齢者特有の制度がある (7)》は、老年看護学概論の授業回数4と5回などが影響していたものとする。このように、協力者は、学習したばかりの内容を理解しながら高齢者のイメージへとつなげていたことがわかる。

### 3. 生活経験と既習内容の両者が関連した高齢者イメージ

《保護や介護を必要とする (12)》は、＜事故に巻き込まれやすい (6)＞＜事故にあいやすい (6)＞などによって抽出されていた。近年、高齢者を狙った『振り込め詐欺』や、『リフォーム詐欺』などが取りざたされている。これはテレビ報道などのマスメディアの影響を受けることで抽出された生活体験に関連したイメージであるとする。一方、同じ《保護や介護を必要とする (12)》のカテゴリーに含まれていた＜介助が必要である (17)＞＜法律で保護されている (2)＞などは、《高齢者特有の制度がある (7)》同

様、老年看護学概論の授業回数4と5回などの影響を受けていたことがうかがえる。このように、生活体験のみ、学習の既習内容関連のみに区別されるのではなく、両者の影響を受けて抽出されたカテゴリーがあった。《経済的特徴がある (11)》《体調を崩しやすい (9)》《死を意識する (4)》などもこれにあたりと考える。つまり協力者は学習した内容を自らの生活体験と結びつけて理解するというプロセスをたどっていたことが推測された。

### 4. 老年看護学教育への提言

#### 1) 高齢者のイメージが記載された個数のばらつき

協力者の生活体験のばらつきにより、各協力者から抽出された高齢者のイメージの個数には、ばらつきがあった。このようなばらつきには、高齢者のイメージに関する討議が有効であるとする。討議の特徴について「様々なものの見方・考え方があるということを実感を伴いながら了解していくことができます<sup>12)</sup>」とされていることから考えても、あまりイメージできなかった学生は、多くイメージできた学生の意見を聴くことで、新たな視点に気づき、自らの視点として活用する可能性を高くする。この際、注意点は、視点だけではなく『なぜこのようなイメージを持ったのか』、つまり根拠も一緒に吸収できるようにすることである。何故なら「学生は討議を通して、内なる自分自身との対話や自己の思考過程の明確化を経験しながら、思考に柔軟性を持たせたり、幅や厚みを加えたり、また、深化させながら能動的な学習能力を獲得していくこととなります<sup>12)</sup>」と報告されているように、自らの思考に幅や厚み、深化を加えることにつながるものとする。これはあまりイメージできなかった学生だけではなく、多くイメージできた学生に対しても新たな視点を発見する機会となると考える。

#### 2) 学生が持つ高齢者に対するイメージを活用した学習方法

表4は教授された高齢者の特徴である。表3の

高齢者のイメージと比較すると、類似した内容が含まれていた。これは先に述べたように、授業を受けたことで高齢者をイメージする視点が絞られたためと考える。教授テーマの『老化』はカテゴリー「加齢に伴う変化がある (62)」や「個体差がある (3)」など、『身体的・生理的側面』は「加齢に伴う変化がある (62)」や「体調を崩しやすい (9)」や「体調に気を使う (4)」など、『心理・精神・スピリチュアル的側面』は「社会性がある (8)」や「自立している (7)」など、『発達段階的側面』は「英知がある (9)」や「好みがある (56)」や「尊敬できる (5)」など、『社会的側面』は「生活に余裕がある (9)」や「日常生活において自分のペースがある (5)」などである。このように、教授した内容とほぼ一致したことから、学生が記載した高齢者へのイメージを活用して高齢者理解を深める討議を行うことが可能であると考えられる。これにより講義によって得た知識とグループメンバーの生活体験を結びつけて『わかる』ことにつながり、今後の老年看護学に関する学習理解を助けるものと考えられる。今回、協力者が記載した高齢者のイメージは、短時間で記されたものである。このため、直観的に答えていたため、根拠となる理由までも考えられていない可能性がある。そこで、グループで、各イメージを持った理由と、エビデンスとして検証されていることなのかどうかを検討してもらおう。これにより、学生の高齢者へのイメージが深まりを増すものと考えられる。しかし、中には、「行動に特徴がある (55)」に含まれていた「酔うと愚痴が多い (1)」や「自らの価値観がある (15)」に含まれていた「選挙が好きである (1)」など、明らかに老年者の特徴とは言い難いものも含まれていた。これらは、グループによる検証によって高齢者のイメージから除外されていくものと考えられる。また、「私たちと変わらない (1)」と言うたった一人しかイメージしなかったが興味深いイメージもあった。これは少数意見としてグループ討議の中で排除されてしまう危険性があるが、重要な視点である。よっ

て、グループ編成によっては、深まることなくグループ討議が終了することも推測されるため教員は動機づけと方向づけを工夫する必要がある。

## V. 結 論

本研究結果から、以下のことが明らかとなった。

1. 看護学生の協力者がもった高齢者イメージは、29個のカテゴリーと437個のサブカテゴリーによって構成された。
2. カテゴリーは、協力者の『生活体験に関連した高齢者イメージ』と学習の『既習内容に関連した高齢者イメージ』、『両者に関連した高齢者イメージ』に分類できた。
3. 学生が記述した高齢者イメージには、老年看護学関連の教科で教授された学習内容と自らの生活体験を関連づけた内容であったことから、高齢者理解を深めるグループ討議の教材として活用できることが示唆された。

## 文 献

- 1) 厚生省大臣官房政策課調査室：厚生白書平成12年度版新しい高齢者像を求めて—21世紀の高齢社会を迎えるにあたって—、東京、ぎょうせい、2000.
- 2) 赤瀬川源平：老人力、東京、筑摩書房、1999.
- 3) 佐藤愛子：老い力、東京、海竜社、2007.
- 4) 日野原重明：「新老人」を生きる、東京、光文社、2001.
- 5) 中島紀恵子他（編）：系統看護学講座 (20) 老年看護学、東京、医学書院、2009.
- 6) 厚生統計協会：厚生 の 指 標、50 (9) 国民衛生の動向、東京、厚生統計協会、2003.
- 7) 清水初子、水戸美津子、流石ゆり子：老年看護学における教育方法としての体験学習—「高齢者疑似体験」学習に関する文献分析から—、山梨県立看護大学紀要、2 (1) : 73-85、2000.

- 8) 高岡哲子、留畑寿美江、服部ユカリ：看護学生の「高齢者疑似体験」後の高齢者観と教育プログラムの検討、旭川医科大学研究フォーラム、6 (1)：33-42、2005.
- 9) 高岡哲子、服部ユカリ：老年看護学における看護学生の高齢者観の育成—教育プログラムのへの提言—、旭川医科大学研究フォーラム、7 (1)、23-34、2006.
- 10) 紺谷栄司、高岡哲子、深澤圭子、渡邊朋枝：通所施設見学において看護学生がもった老年者観の検討、名寄市立大学、(3)：39-47、2009.
- 11) 奥野茂代、大西和子：老年看護学-概論と看護の実践 (第4版)、東京、ヌーヴェルヒロカワ、2010.
- 12) 村本淳子 (編)：わかる授業を作る看護教育技法2 討議を取り入れた学習法、東京、医学書院、2001.

## A Study of Nursing Students' Perceptions of Elderly People Following Special Lectures about Gerontological Nursing

TAKAOKA Tetsuko, OKAMOTO Reiko , SAKAKIBARA Chisako and KOHEI Yukari

**Abstract:** The objective of this study is to investigate the effectiveness of lectures given to deepen nursing students' understanding of elderly people. The students' perceptions of elderly people were analyzed following lectures about gerontological nursing. The participants were 162 nursing students in the second year of a four-year college program who gave written consent to participate in the study. The participants were asked to describe their thoughts about elderly people on the specified paper at a specified time, and then a content analysis was conducted. As a result, we obtained 2,352 data points which were then classified into 29 categories with 437 sub-categories. The 29 categories were also classified into three categories: "thoughts on the elderly related to life experience," "thoughts on the elderly related to previous knowledge" and "thoughts on the elderly related to both." Of these three, the category that produced the most data was "thoughts on the elderly related to life experience." It was suggested that at the early stage of studying gerontological nursing, the students' own experiences significantly affected their perceptions of elderly people. It can be inferred that because focal points to recall were narrowed by the content of study, the data were categorized into the small number 29. Therefore, it was suggested that students' thoughts about the elderly could be used as material for group discussion.

